

2

行書七言絶句屏風

頼山陽 (一七八〇～一八三二)

江戸中期 紙本墨書 各扇二六・六×四八・二cm

硯餘焦墨手兩閑試学倪家  
側筆山無素雲林真面目  
本来不在點皴間

蒼溜聲中滋農煤恰滿雲  
時幾層堆怪他夢催非互句  
峯々津金雨氣來

頼山陽は、江戸時代後期の儒者。安芸(広島県)の人。父・春水、母・静子の長男として、江戸で尾藤二洲らに学ぶ。二十一歳で安芸を出奔、脱藩の罪で自宅幽閉となる。赦免の後、京都で開塾。詩、書に才能を発揮。幽閉中に起稿した『日本外史』は、幕末の尊攘派に強い影響を与えた。右曲の詩は、『山陽詩鈔』卷一所収「題自画山水六首」の七言絶句。文化十四年(一八一七)頃に作詩されたと考えられる。作詩の前年には父・春水が亡くなり、文政元年(一八一八)には、父の三回忌を済ませ、その足で九州旅行へと出掛け、多くの書の揮毫の依頼を受けている。山陽にとっては人生の一大転機となった時期のもの。

〔釈文〕

硯余焦墨手兩閑試学倪家  
側筆山無素雲林真面目  
本来不在點皴間

蒼溜聲中滋農煤恰滿雲  
時幾層堆怪他夢催非互句  
峯々津金雨氣來



〔頼襄之印〕  
(朱文方印、2.1×2.1cm)



〔頼氏子成〕  
(白文方印、2.2×2.2cm)

3

行書五言古詩軸

頼山陽 (一七八〇～一八三二)

江戸後期 紙本墨書 一三四・一×六〇・九cm

花看意中花友逢意外友休言是  
意外吾心待汝久曾違尋芳約半春  
罵滿口能來及此日一咲同我酒不愁看核乏  
有客弁旨有日落花逾明怯聞華鯨  
吼燈火乱月明躡街相先後嵐峽更有  
花再注當攜手

山陽外史襄

〔釈文〕

花看意中花友逢意外友休言是  
意外吾心待汝久曾違尋芳約半春  
罵滿口能來及此日一咲同我酒不愁看核乏  
有客弁旨有日落花逾明怯聞華鯨  
吼燈火乱月明躡街相先後嵐峽更有  
花再注當攜手 山陽外史襄



〔山陽外史〕  
(朱文方印、2.9×3.1cm)



〔頼襄〕  
(白文方印、3.0×3.1cm)



〔我思古人實獲我心〕  
(朱文方印、3.6×1.5cm)

本作は、自作詩「看花知恩院適逢君夷来」(「山陽遺稿」詩一所収)を揮毫したもので、天保二年(一八三二)春、「君夷」こと田能村竹田と知恩院での再会を詠んだもの。この後、竹田と嵐山を訪れることになる。この時期の書風は、中国・明代の文人、屠隆(一五四三～一六〇五)の影響が指摘されている。なお引首印は高芙蓉が刻したもの。